

「女子王座決定戦」歴代優勝者

回	年	レース場	優勝選手
1	1987.12	浜名湖	鈴木 弓子
2	1989	多摩川	日高 逸子
3	1990	多摩川	鵜飼菜穂子
4	1991	蒲郡	鵜飼菜穂子
5	1992	戸田	鵜飼菜穂子
6	1993	多摩川	佐藤 正子
7	1994	浜名湖	谷川 里江
8	1995	多摩川	谷川 里江
9	1996	戸田	山川美由紀
10	1997	蒲郡	渡邊 博子
11	1998	三国	西村めぐみ
12	1999	尼崎	横西 奏恵
13	2000	丸亀	柳澤 千春
14	2001	多摩川	山川美由紀
15	2002	徳山	岩崎 芳美
16	2003	芦屋	西村めぐみ
17	2004	多摩川	海野ゆかり
18	2005	大村	日高 逸子
19	2006	浜名湖	横西 奏恵
20	2007	徳山	寺田 千恵
21	2008	津	横西 奏恵
22	2009	尼崎	新田 芳美
23	2010	下関	寺田 千恵
24	2011	三国	田口 節子
25	2012	多摩川	田口 節子
26	2012.8	若松	山川美由紀

※第2回から25回までは毎年3月に開催

●女子選手の通算1着数・ベスト5

順位	選手名	1着数
1	山川美由紀	1976
2	日高 逸子	1805
3	鵜飼菜穂子	1572
4	谷川 里江	1525
5	角 ひとみ	1372

(2012.10.10現在・他も同様)

●女子選手の通算勝率・ベスト5

順位	選手名	勝率
1	横西 奏恵	6.84
2	日高 逸子	6.78
3	山川美由紀	6.74
4	寺田 千恵	6.64
4	田口 節子	6.64

(出走回数1000回以上)

女子選手も60周年

—そして人気爆発! この10年—

●最近7年間の女子リーグ戦売上げの推移

年度	売上げ
17	190億円
18	187億円
19	199億円
20	189億円
21	208億円
22	255億円
23	226億円

「女子リーグ」最近7年間の女子リーグ戦の売上げは、1990年代後半から、オール女子戦や男女半戦がずつとW優勝戦の開催が増え、売上げに貢献している。

●女子選手の優勝回数・ベスト5

順位	選手名	優勝回数
1	山川美由紀	71
2	日高 逸子	66
3	鵜飼菜穂子	56
4	横西 奏恵	46
5	寺田 千恵	42

「優勝回数」女子リーグ戦の優勝回数に限定するならば、鵜飼菜穂子がトップ。山川の優勝は混合戦のGⅠ四国地区選での優勝も含んでいる。



平成22年の最優秀新人表彰を受けた平高奈菜

で、年間出走回数300走を超える選手もいる。そしてこの状況が反映されたものは定かではないが、最近デビューする女子選手も増えており、今年11月からデビューする111期にいたっては26名のうち女子選手が8名も占める。

そしてこの度、新たに女子戦の根幹レースとなる「第1回賞金女王」が、発祥の地・大村で60周年の年に開催される。ここからまた、女子選手と女子戦の新たな歴史が始まっていくことだろう。

女子プロスポーツの草分け

日本の女子プロスポーツを語る上でも、ボートレースの女子選手が存在意義は大きい。

戦後の公営競技では、いずれも女子選手を採用していたが、その多くは昭和30年代後半に姿を消した。ここ最近、競輪やオートで女子選手が復活したが、ボートでは選手数が激減はしたものの、絶えることなく水面を走り続けてきた。それが今の女子戦・女子選手の人気に繋がってきたといえる。昨今の女子アスリートブームに乗っただけではない。

また単に年月が長いだけでなく、プロスポーツとして確立されてきた側面はさらに大きい。以前より賞金下がったとはいえ、女子選手の平均年収は1000万円を超える(産休などで長期欠場の選手を除く)。あまり成績が上がらない選手でも500万円前後はあるので、プロ選手として成り立たない選手は皆無といえる。

他の女子のプロスポーツと比べても、その差は歴然といえる。昨年来話題になることの多い女子サッカーでは、プロ契約をしている選手でもその年俸は500万円以内が大半。ゴルフやテニス、ボウリングなどでは、年俸制でなく賞金制だけに、一部のトッププロのみが高額賞金を稼ぎ、下位では生活が苦しい。大会に参加する経費もないので、レッスン料などで糊口をしのいでいる選手が多いのが実情だ。

またプロスポーツ選手としては選手生命が長いのも、ボート選手の長所といえるだろう。とくに最近、結婚・出産を経ても現役を続ける選手が多くなっている。



●女子選手及び女子戦のエポック

西暦	年	できごと
1952	昭和27	4月に大村でボートレース初開催 女子選手登録第1号は則次千恵子(登番78)
1953	28	第1回全日本選手権に則次ら女子3選手が出場
1954	29	3月、芦屋で初のオール女子戦が開催
1955	30	下関1周年で戸板君子、福岡2周年で田川照子が優勝
1957	32	杉本明子が住之江1周年を制する
1959	34	大村で女子ダービー開催 *30年代後半から女子選手が減少 *50年代初頭には4名まで減る
1980	55	9年ぶりに女子選手がデビュー(田中弓子) *以後、急速に女子選手が増える
1983	58	8月、住之江で23年ぶりにオール女子戦開催
1987	62	12月、浜名湖で第1回女子王座決定戦開催
1992	平成4	鵜飼菜穂子が女子王座3連覇を達成 古川美千代が現役39年で引退(最年長記録)
1999	11	四国地区選で山川美由紀が優勝
2000	12	女子王座決定戦がGⅠに昇格 女子リーグの出場資格が登録16年未満に限定 唐津GCで寺田千恵が女子選手で初のSG優出
2001	13	女子選手の最低体重制限が45kgから47kgへ
2003	15	総理杯で横西奏恵が優出(23年には笹川賞で優出)
2006	18	21年の最優秀新人に平高奈菜、女子が2年連続受賞
2010	22	22年の最優秀新人に平山智加が選ばれる
2011	23	田口節子が4000番台で初めて女子王座を制する
2012	24	大村GⅡ「男女ガチンコMB大賞」で宇野弥生が優勝 12月、大村で「第1回賞金女王決定戦」開催へ

平成11年2月の四国地区選手権で、山川が大外から差しを決めて優勝を飾った。女子選手がGⅠを制したのは、先述の杉本明子(住之江1周年)以来で42年ぶりの快挙だった。

その1カ月後、第12回女子王座で新たな「怪物」がセンセーショナルに登場する。6mの強風の中、Fを2本持ちながら大外から豪快無比なまくりで制したのは横西奏恵。何とこれがデビュー初Vでもあった。

なお12年度からは、女子リーグ戦の参戦資格が登録16年未満と限定された。これにより、キャリアを積んだ女子選手は順次卒業していくことになった。続いて13年6月のグラウンドチャンピオン決定戦で、寺田千恵が女子初のSG優出を果たす。

G優出を果たす。それも1号艇だったのが、膨らんだが、惜しくも植木通彦に阻止された。

それでも女子選手の地力向上のアピールには十分だった。この頃から「女子選手と男子選手の最低体重の差が5kgというのは大き過ぎるのでは?」という声が出て、15年5月から、それまでの45kgから47kgへと、増量「された」。

横西に続いてトップ戦線へ顔を見せるようになったのが、濱村美鹿子や双子の池田姉妹(明美・浩美)、香川素子・永井聖美らだ。



SGで2回優出を果たしている横西奏恵

五、田口節子ら4000番台の台頭

17年頃から徐々に、85期の田口節子を筆頭に、堀之内紀代子・佐々木裕美・金田幸子・細川裕子・三浦永理ら4000番台の選手がリーグ戦でも上位へ。

とはいえ、3000番台の選手が力を落としてきたわけではない。日高は名人戦でも毎年優勝候補だし、寺田は遅まきながら女子王座を二度手にした。横西は史上タイの三度戴冠の後、SGで2回の優出を果たしている。そして今年度から8月に移行した女子王座を制したのは山川。彼女もV3で並んだ。

を初優勝したのは昨年のこと。それでも21年の最優秀新人に平山智加、22年の同タイトルに平高奈菜が連続して輝き、鎌倉涼は平成生まれの選手として最初のA級選手となった。さらに宇野弥生が、今年7月の大村GⅡ「男女ガチンコMB大賞」で大金星を挙げたことも記憶に新しい。3000番台の壁は高いが、4000番台の精鋭女子が世代交代に挑んでいる。

最近10年ほどの女子戦の人気は高く、リーグ戦だけでなく、「OG」も加わるオール女子戦や、男女半々のあつせんによるW優勝戦も増加。トップクラスの女子選手は全国で引っ張りだこ

大村の女子戦にはいつも期待!!

「毎年大村の女子戦には、『蛭子能収杯』ということで呼んでもらっています。だから女子戦や女子選手には思い出や愛着がありますね。強さでいえば鵜飼菜穂子。女子戦で強かったという点では、いまだにナンバーワンだと思います。横西奏恵はカワイイのに、レースに行くと男勝り。寺田千恵が唐津グラチャンで優出した時は、女子のSG制覇を期待してドキドキしましたよ。」



漫画家・蛭子能収さん

柳澤千春は波乱万丈の選手生活が思い出に残るひとり。金田幸子も開会式コメントが面白くて楽しませてくれました。それと香川素子は、舟券の相性もいいので、今回も賞金女王にいられたら期待しています」(談)